

古典指導のヒント

「友情」のあり方から読む「木曾の最期」

小助川元太

一 はじめに

古典の授業は文法解説と口語訳だけのつまらないものだと思っている生徒は多い。そのような生徒たちに、古典文学の面白さを伝えたい。そこで、文法解説を最小限に抑え、授業の中心を作品テーマの考察に絞ってみてはどうだろうか。本稿では、「国語総合」の定番教材である『平家物語』『木曾の最期』を、生徒たちにとって身近なテーマである「友情」のあり方から読んでみたい。

二 「木曾の最期」で描かれる「友情」

「木曾の最期」は、栄華を極めた平家

一門を都から追い出し、一時は天下を取ったかに見えた木曾（源）義仲が、源頼朝の派遣した軍勢によって追いつめられ、討ち取られてしまう場面である。主従二騎となつてしまった義仲と今井四郎

兼平のやりとりが中心となるが、そこには当時の武士特有の価値観とともに、現代にも通用する人と人との心の絆が、簡潔な表現の中にも細やかに描かれている。絶体絶命となつた義仲と今井に残された道は、討ち死にするか、自害するかである。『平家物語』には、しばしば「名を惜しむ（＝不名誉を恐れる）」武士の姿が描かれる（たとえば、巻一一「弓流」では、戦の最中に海に弓を落としてしまった源義経が、弓の厄弱さを敵に

嘲笑されることを恐れ、命がけでそれを拾う姿が描かれる）。この場合、義仲が「名を惜しむ」ならば、最良の選択は自害することであった。今井が「日ごろは何とも覚えぬ鎧が今日は重うなつたるぞや。」と弱音を吐く義仲を「御身もいまだ疲れさせたまはず。」と励ましたにもかかわらず、義仲がともに戦うことを望んだときに「御身は疲れさせたまひて候ふ」と相反する指摘をしたのは、義仲に自害を勧めるためであった。そこから垣間見えるのは、ひたすらに義仲の名譽を守りたいと願う今井の「友情」である。

三 今井の立場になつて考えさせる

相手に自害を勧めることが「友情」であるというのは、現代を生きる生徒たちにとつてはやや受け入れがたい価値観かもしれない。だが、この時代、名のある武士が名もなき雑兵に首を取られることは、後々まで残る恥であり、名譽を保持するためには、討ち取られる前に自害する必要がある。このときの今井が最も恐れたのは、自分が大切に思う義仲が不名誉な最期を遂げ、後の世の者たちに嘲笑されることであつたのだから。

そうした背景を押さえた上で、生徒には、

「もし自分が今井の立場であったら、

1. 義仲の願いを聞き入れて、ともに討ち死にする。

2. あくまでも義仲に自害を勧める。

のいずれを選択しただろうか」

という発問を試みてみたい。

この場合、アクティブ・ラーニングを導入すると、より効果的である。アクティブ・ラーニングといっても、四〇五人といった小集団グループに分けて、それぞれの選択とその理由を発表させるという簡単な方法が良い。生徒同士の意見交換の中で、それぞれの考える「友情」のあり方の違いが見えたり、このときの今井の切実な思いに気づくことができたりするはずである。

このように作品で描かれるドラマを、自分たちの問題として読むことを通して、生徒たちは古典文学を読むことが決して無意味なことではないことに気づくはずである。

四 義仲の言動に注目させる

また、本場面では今井の言動のみに目

が行きがちであるが、より作品を深く読むために、義仲の言動にも注目させたい。

義仲の望みは、生死をともにすると誓い合った親友今井とともに死ぬことであつた。このときの義仲にとっては、名誉などどうでもよかったのである。それが今井の説得に応じたのはなぜなのかを考えさせてみたい。

具体的には、

「もし自分が義仲の立場であつたら、

1. 今井の説得に応じて、一人で自害に向かう。

2. 今井の説得に従わず、一緒に戦う。

のいずれを選択しただろうか」

という発問をして、小集団での話し合いをさせてみると、今井の義仲に対する「友情」だけではなく、義仲の今井に対する「友情」にも目を向けることができ、二人の「友情」のあり方への理解がより深まるであろう。

五 おわりに

よく「教科書の古典はつまらない」という話を聞く。たしかに教科書にはさまざまな制約があるため、掲載できる作品は限られてくる。しかも、古典の世界に

触れるためには、言葉の壁を乗り越えなければならぬという厳しい現実もある。

もちろん、自力で言葉の壁を乗り越えるためのスキル、すなわち文法や語彙を身につけさせることができれば、読めなかつたものが読めるようになるという知的な喜びを味わわせることもできるであろうし、文法的な違いが作品の重要な解釈に関わってくることに気づかせることもできるだろう。だから、品詞分解や口語訳のトレーニングが全く必要のないものだとは思わない。

だが、内容の面白さに触れることなく、そうしたトレーニングに終始するだけでは、生徒たちはますます古典から離れて行ってしまうだろう。

古典を読む楽しさは、今を生きる我々が、何百年も前の人と繋がることのできる場所にある。生徒たちに古典文学が読む価値のあるものであることを知ってもらうには、まず、それを扱う教員自身が「教科書の古典はつまらない」と決めつけずに、それぞれの作品に向き合ってみて、その面白さを発見する必要がある。それが古典嫌いの生徒を減らすための一歩となるのではないだろうか。

(こすけがわがんだ・愛媛大学)